「ツートップ圏外」の端末、選ぶ理由はあるか

ドコモで「ツートップ」から外れた端末や、au、ソフトバンクのその他のアンドロイド端末にも、優れた機種は多い。だが、シャープや富士通の上位機種は新規契約・機種変更時の実質負担額が4万円を超えており、スペックや使い勝手に関して、誰もが価格差を乗り越える魅力を見いだせるとは言いにくい。各社とも突出した独自機能や特定のユーザー層向けの商品企画で差別化を図る方向にあり、自分のニーズがこうした方向性に合致していれば、選択肢には入るだろう。

㊨auの「URBANO L01」(京セラ)。スマホ初心者を意識し、画面下のボタンを大きくしてある

㊨ドコモ「らくらくスマートフォン2」(富士通)。LTEに対応

世界的に勢いのあるドコモのツートップ2社は、海外でも新機種を次々に発表。左写真は6.4型の大画面端末、ソニー「Xperia Z Ultra」。国内発売は未定

フルセグ

ソフトバンク「AQUOS PHONE Xx 206SH」(シャープ)は、フル解像度の地上波テレビ放送を視聴・録画できる

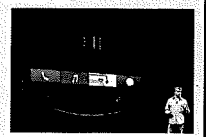
ユーザー特化

小型・高性能

㊨ドコモ「AQUOS PHONE si SH-07E」(シャープ)はiPhone 5と同等のサイズ感㊨㊧ドコモ「ELUGA P P-03E」(パナソニック)はケータイからの乗り換えユーザーを意識した端末

iOS 7から見える、次期iPhoneの実力

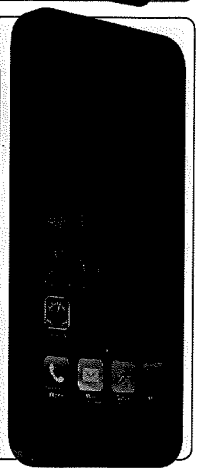
6月、アップルが次期iPhoneにも搭載されるとみられる「iOS 7」を発表した。アンドロイド端末と同様に、簡易設定画面からWi-Fiのオン・オフなどが切り替え可能に。マルチタスクも強化され、アンドロイド同様にすべてのアプリでバックグラウンド動作が許可される。ただ、このままではCPUの稼働が増え、電池の消耗が早まるため、次期iPhoneではCPUが世代交代し高速化するとともに電池が大型化する可能性もある。コンパクトな本体サイズを維持できるかどうかに注目。



㊨「iPod touch」と同様、アルミ酸化加工を用いたカラーバリエーションも登場しそう㊧車載画面との連携も強化

㊨画面デザインを一新。アイコンは立体感を強調しないデザインになった

㊧アンドロイド同様、各種設定にすぐアクセスできる㊧内蔵アプリも全面刷新



優れた音楽再生機器でもあるスマートフォン。ただ、内蔵スピーカーの音質が貧弱なのが難点だ。自室や旅先でスピーカーから音楽を流してみて、ガッカリした経験のあるユーザーは多いだろう。音楽再生にフル活用するなら、外付けのスピーカーは欠かせない。

11年末にボーズが発売したワイヤレススピーカーは、高音質を売りにして、3万円を超える価格ながら大ヒットした。これを見た競合他社が相次ぎ新製品を投入、現在では多数のワイヤレススピーカーが売り場を賑わしている。

ただ、新規参入が増えすぎた影響で機能の細分化が進み、商品選びは難しくなっている。ポイントは、まずどんな機能が必要か、どんな環境で音楽を聴くかを見極めることだ。

家の音響機器をこれ以上増やしたくない、1台に集約したい、という人に薦められるのが、多機能コンポ型のスピーカー。ソニー「CMT-BT40」は、ブルートゥース接続でのワイヤレス再生に加え、スマートフォンを直接USBケーブルでつないでの再生(同時に充電も可能)、さらにはCDの再生やFM・AMラジオ受信などにも対応したスピーカーだ。これだけの機能をカバーした新商品ながらも、実勢価格は2万6800円と値頃感がある。

同じような「一石二鳥」型の商品として、ホームシアター型のスピーカーがある。同じソニーの「HT-CT260」は、テレビと光デジタルケーブルでつないで使うホームシアター用のスピーカー。ブルートゥース機能を内蔵しており、スマホの音楽も楽しめる。

スマートフォン活用術

ワイヤレススピーカー スマホが本格オーディオに変身 無線方式と付加機能で選び分ける

店頭に並ぶ多数の商品、何が違う?

1 接続方式が違う

同じ「ワイヤレススピーカー」でも、使う無線の方式は商品によって異なる。Bluetooth接続の音響機器はあまり音質が良くないとされてきたが、最近の商品では改善されてきている

Bluetooth

多くのスマホやスピーカーが対応。最近はBluetoothをより高音質にする「aptX」という技術も広がっている

AirPlay

iPhoneなどで使えるアップルの規格。Wi-FiやLAN経由で、音質を落とさず音楽が送れる

DLNA

Wi-FiやLANを通じて音質を落とさず音楽が送れる。汎用規格だが、接続はやや面倒

2 付加機能が違う

差別化のため、多くのワイヤレススピーカーはプラスアルファの機能を備えている。ホームシアター型のように、本来は別のカテゴリーの商品がスマホ接続機能を備える場合も

価格

ピュアオーディオ型

高音質を前面に出し、機能を絞り込んだタイプの商品。老舗の音響機器メーカーなどの商品がこれに当たる。音楽データを再圧縮して送るBluetoothではなく、AirPlayやDLNAを採用し、価格は3万円を超えるものも多い。

バイオニアの商品は、AirPlayとDLNAの両方に対応したスピーカーとしては例外的に安く、1万円台

多機能コンポ型

従来のラジカセやミニコンポに代わる商品を目指すべく、スマホ接続を軸にCD再生やラジオ機能などを加えた多機能な一体型タイプ。ソニーやパナソニックなどが相次ぎ新商品を発売している。価格はやや高め。

ソニーの商品は、CDを読み込んでデータ化し、ケーブル接続したウォークマンに転送する機能も備えている。2万円台から買える

機能

ポータブル型

メガネケース程度の大きさで、電源のない場所でも使えるよう充電池を内蔵するものが主流。5000円以下で買えるものもあるが、1万円を切る価格では音質の良いものは少ない。店頭で試聴してから買いたい。

小型でも音質を売りにする、1万円超の商品が増えている。ボーズが6月に発表した新商品は2万2890円というかなり強気の価格

ホームシアター型

薄型テレビの音質を手軽に改善できる商品として従来から人気だった、バータイプのスピーカーとサブウーハーの組み合わせ。昨年以降、各社がBluetooth機能を備えた商品を発売。2万円台から買える。

ソニー「HT-CT260」は、いち早くBluetooth接続に対応したホームシアター用のバースピーカー

BUY IT NOW

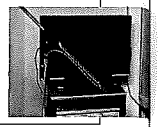
それぞれの傾向はどう違う？ 音のバランスを計測

㊤㊦アパートの6畳間を使って計測 ㊨音源にはiPod touchと音響計測用のノイズデータを使用

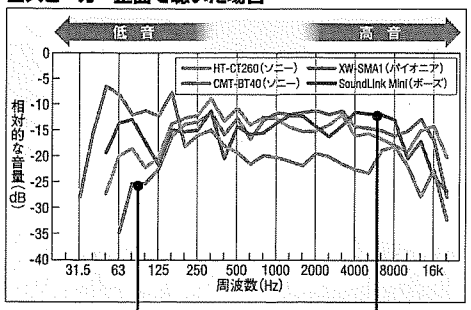
実際の部屋を使い、各スピーカーの音の傾向（周波数特性）を分析。音の安定感や低音の迫力では、パワーの大きいソニーのホームシアター型が有利な結果となった。バイオニアのスピーカーは、「人間の耳の特性に合う、バランスの取れた音」（森本浪花音響計画の浪花克治氏）で聴きやすかったが、角度を変えるとややバランスが崩れた。

テスト条件

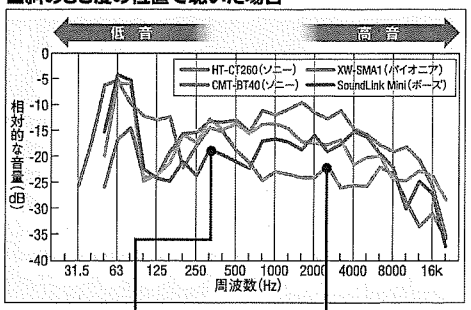
低音（20Hz）から高音（20kHz）までが含まれた音響機器の試験用のノイズ信号（ピンクノイズ、データはApple Lossless形式）を、iPod touchから無線で送信。スピーカーから1.5m、床から1.1m離れた位置に集音マイクを設置し、各商品の周波数特性を調べた



■スピーカー正面で聴いた場合



■斜め60度の位置で聴いた場合



各グラフは、スピーカーから出た音に占める低音・高音の割合を示す。ソニーのコンポ型（CMT-BT40）は低音が少なめだが、低音強調モードなどである程度の調整が可能

正面からの計測では、ボーズのスピーカーが小型ながら安定した低音を出していた。低音を強調するための振動板（パッシブラジエーター）を2枚内蔵した設計が功を奏している。ただ、音量を大きめにすると本体が震動する

斜め方向からの計測では、多くのスピーカーで音のバランスが崩れ、ボーズは中音域がやや聞き取りにくくなった。6畳程度の広さの部屋ではこうしたことが起こりがち

ソニーのホームシアター型（HT-CT260）は、横長なスピーカーや強力なサブウーハーの効果もあって、角度を変えても音の傾向があまり変わらなかった。サブウーハーの設置場所は自由に変えられる

音の傾向と環境で選ぶ「こんな人に、この一台」

広めの部屋で聴くなら

HT-CT260（ソニー）

他のスピーカーに比べてパワーがあり、部屋の中で聴く位置を変えても音のバランスが崩れにくい。もともとがホームシアター用なので、低音もかなり強めで

低音重視なら

SoundLink Mini Bluetooth speaker（ボーズ）

小型スピーカーとは思えない低音の迫力は、一度は体感する価値がある。スピーカーの正面、しかも近めの位置で聴いたほうが本領を発揮できる

長時間聴くなら

XW-SMA1（バイオニア）

バランスの取れた音で万人受けする。低音、高音とも強すぎないので、聴いていて疲れない。低音をより強化した上位モデルもあるが、価格は3万円を超える

協力を依頼。実際に人が生活しているアパートの1室（6畳間）に4機種を順番に設置し、スピーカーから出る音を集音マイクで拾い、特性を分析した。

顕著に差が出たのが、低音の力強さ。このクラスのスピーカーはさほどパワーが大きくないため、「近くで聴くと低音が出ているように感じても、少し遠ざかると大幅に減衰する」（森本浪花音響計画・副社長の浪花克治氏）。店頭で試聴する際には気づきにくいポイントなので注意が必要だ。ホームシアター型のHT-CT260は、サブウーハーとセットになっており、低音に関してはかなりの余裕が感じられた。ボーズのサウンドリンク ミニも、サイズの割には低音がよく出ていた。

また、スピーカーに対して正面ではなく斜め（60度）の位置で音を分析したところ、多くの商品で音の傾向が大きく変わってしまった。「6畳程度の広さの部屋では、聴く場所によって特に低音域の聞こえ方が大きく異なってくる。良いスピーカーを買うのも重要だが、このクラスのスピーカーでは最適な場所で聴くことも重要」（浪花氏）。音を流しながら部屋の中を歩き回ると、音が明らかに変化しているのがわかるはずだ。バランスが良いと思える場所を探して設置するのがよい。

4商品のなかでは、アンプ自体の出力が大きく、低音にも余裕があるホームシアター型のHT-CT260が、聴く位置による音の変化が最も少なかった。部屋の広さや聴く位置を選ばず楽しめるという点では、HT-CT260は特に優れた商品といえるだろう。

ピュアオーディオ型

XW-SMA1（バイオニア）実勢価格1万6600円

LAN経由で非圧縮の音源も再生できる

家庭内LANにつないで使う、AirPlay・DLNA対応の音質重視のスピーカー。高音質での再生が可能な両規格に対応するスピーカーとしては特に安い。iPhoneやアンドロイド端末向けに専用アプリも配布。無線LANルーターとこのスピーカーとは有線LANで接続したほうが再生が安定する。

●サイズ・重さ／幅320×高さ180×奥行き145mm・2.3kg●最大出力／非公表●端子類／ステレオミニ、USB、LAN

㊨背面にはLAN端子を用意。iPhone接続用のUSB端子もある ㊤前面の操作パネルはタッチ式。リモコンも付属

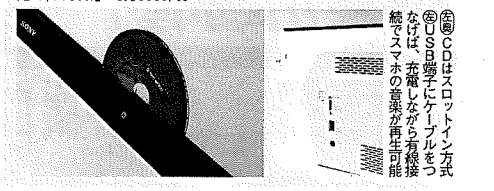
多機能コンポ型

CMT-BT40（ソニー）実勢価格2万6800円

CDやラジオも集約した万能型の一台

Bluetoothスピーカー機能に加え、CDの再生やFM・AMラジオの受信も可能な万能タイプで、機能の豊富さの割に値頃感がある。NFCを使った、スマホとのワンタッチ接続にも対応。音質を向上させた上位機種「BT60」は実勢価格3万4800円、AirPlayとDLNAにも対応の「BT80W」は3万9800円。

●サイズ・重さ／幅481×高さ202×奥行き86mm・2.8kg●最大出力／10W（5W×2）●端子類／ステレオミニ、USB、ウォークマン専用端子



㊤㊦CDはスロットイン方式 ㊨USB端子にケーブルをつなげば、充電しながら有線接続でスマホの音楽が再生可能

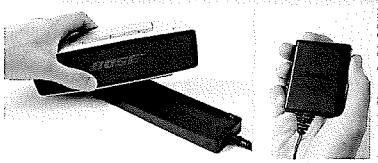
ポータブル型

SoundLink Mini Bluetooth speaker（ボーズ）実勢価格2万2890円

手軽に持ち運べるサイズでも迫力ある低音

小型ながらも迫力ある低音で、同様のサイズのポータブルスピーカーとは一線を画す。ただし価格も高め。バッテリー内蔵で、フル充電時は約7時間の連続再生が可能。専用の充電台も付属するが、4商品で唯一リモコンが付属しない。7月12日発売。より大型の「SoundLink Bluetooth Mobile speaker II」（実勢価格3万1500円）もある。

●サイズ・重さ／幅180×高さ51×奥行き59mm・655g●最大出力／非公表●端子類／ステレオミニ



㊤㊦片手でラクに持てる大きさ。充電台に置いたほうが音は安定する ㊨充電器は携帯電話用と同等のサイズ

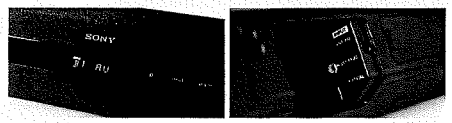
ホームシアター型

HT-CT260（ソニー）実勢価格2万4500円

パワフルで設置が簡単。値頃感もある

ホームシアター用だけあって、音の広がり感と重低音の迫力は随一。サブウーハーは無線接続で、配線の手間が少ない。スマホとの接続にはBluetoothを利用。音質の向上した後継機「HT-CT660」（実勢価格3万9800円）もあるが、CT260のほうが値頃感がある。

●サイズ・重さ／フロント：幅940×高さ89×奥行き97mm・2.8kg、サブ：幅271×高さ390×奥行き271mm・7.2kg●最大出力／270W（フロント85W×2、サブ100W）●端子類／光デジタル、同軸、ステレオミニ



㊤㊦リモコンからの操作に加え、本体前面のパネルからのタッチ操作も可能 ㊤㊨テレビとは光デジタル端子で接続する

フロントスピーカーとサブウーハーでワンセットの大型機器だが、フロントとサブを無線で接続でき、配線の手間が少ないのも魅力。実勢価格は2万4700円と、こちらも値頃感がある。

自分の部屋で聴くだけなので小さくてもよい、家庭内で持ち運びたい、という人には、ボーズの「サウンドリンク ミニ ブルートゥーススピーカー」（実勢価格2万2890円）が向く。本体は655gとずっしりしているが、カバンに入るサイズ。それでいて「システムオーディオと同等の迫力ある音が出る」（ボーズ）。充電池を内蔵し、電源アダプターも小型のものを同梱。持ち運びを意識した工夫が多い。

一方、CDの楽曲を高音質なフォーマット（アップル・ロスレス方式など）で楽しんでいるユーザーは、データを再圧縮するブルートゥースを使うことに、どうしても抵抗があるはずだ。そんなユーザーには、Wi-FiやLAN経由で、再圧縮せずにデータを送って再生できる「XW-SMA1」（バイオニア）が向く。iPhoneなどアップル製の機器からは「AirPlay」機能を使い、アンドロイド端末からは「DLNA」を使ってデータを送る方式。AirPlayのみ対応の機器は珍しくないが、DLNAにも対応する高音質のスピーカーとして、1万円台半ばの実勢価格は非常に安い。

価格帯は近いとはいえ、本体サイズの全く異なるこれらの4機種。音の傾向はどう違うのだろうか。今回は音楽ホールの音響設計・分析などを手がける森本浪花音響計画（東京都新宿区）に